

ハバナ・カルペンティエール協会訪問記

浦野 喬 (写真も)

今から 50 年ほど前、川端康成がノーベル文学賞を受賞する所に「有力候補」といわれた作家の一人に、キューバのアレホ・カルペンティエール (1904~80) がいます。ノーベル賞の公式ウェブサイトによると、彼は実際 1965 年と 66 年にノミネートされていますが、最終候補者への絞り込みの時点で落とされてしまったようです。

カルペンティエールはマジックリアリズムの創始者の一人といわれ、彼と並び称されたグアテマラのアストゥリアスが、1967 年にノーベル文学賞を受賞しました。ちなみに川端の受賞はその翌年です。

アストゥリアスの受賞理由は、「ラテンアメリカ先住民の伝統と民族性に深く根差した強烈な業績によって」というものでした。思うにこの理由であるならば、カルペンティエールにも同時受賞すべきだったのではないのでしょうか。(余談ですが、ノーベル文学賞の授賞定数は「1」ですが、過去には複数名授賞の例があります。しかし 1974 年にスウェーデン・アカデミーのメンバー 2 人に与えたことで物議を醸して以来、行われていません。)

カルペンティエールの代表作のひとつが『この世の王国』(1949 年) です。題材は 19 世紀初頭のハイチ独立で、中篇ながら密度が濃く、激動の時代を過ごした主人公の黒人奴隷ティ・ノエルが結末にいだく感慨は絶品でした。

〈人間は、自分がだれのために苦しみ、希望をつないでいるのか決して知ることはないのだ。-略- さまざまな悲しみと義務に苦しめられ、貧困にあえぎながらも気高さを保ち、逆境にあっても人を愛することのできる人間だけが、この世の王国においてこのうえもなく偉大なものを、至高のものを見出すことができるのだ。〉(木村栄一訳・サンリオ文庫)

2018 年 9 月、私は初めてハバナを訪れました。近世要塞など定番の観光スポットのほかにもハバナを満喫したいと考えていた私は、ふと「カルペンティエールにゆかりの史跡はないのかな」と思い、インターネットで検索すると「カルペンティエール協会」という施設があることを知りました。その情報には「元伯爵邸」とあり、作家の住まいとは書かれていませんでしたが、見学コースに組み入れることにしました。場所は旧市街の大聖堂広場から、エンペドラド通りを 50 メートルほど西へ入ったところです。



この道筋には、ラ・ボデギータ・デル・メディオという人気のレストランがあります。

ヘミングウェイ（1954年ノーベル文学賞受賞）が通った店としてつとに有名で、路上にまで客があふれて大盛況でした。このボデギータの隣に、知らないでいると素通りしてしまうほどひっそりと、カルペンティエール協会がありました。黄色と水色の二色づかいが鮮やかなコロニアル建築で、玄関を通った先にこぢんまりとした中庭があります。見上げると2階のバルコニーがぐるりと取り囲んでいるのは、中庭に少しでも日陰をつくろうという工夫でしょうか。腰壁のタイル装飾も、ここが由緒ある邸宅だったことを物語っているようです。



邸宅の玄関に入って右側の小部屋に、カルペンティエールの代表作が展示されていました。案内人の解説によれば、この邸宅は作家の住まいではなく、晩年の大作『光の世紀』（1972年）の冒頭に登場する屋敷のモデルになったのだそうです。

『光の世紀』は18世紀のハバナが舞台で、「キューバ版フランス革命物語」と評されているようですが、残念ながら訪問の時点で未読でした。また、カルペンティエールに関しては、ハバナ市内に旧宅があり、2018年に文化財に指定されるという報道もありました。実はこの報道はキューバ訪問以前に読んでいたのですが、てっきり「カルペンティエール協会が旧宅である」と勘違いしていました。

次にハバナに行くときは、カルペンティエール旧宅も見学してみたいものです。そしてそれまでに、超大作の『光の世紀』（日本語訳の単行本は上下2段組で340ページ!）も読んでみたいと思います。

編集註

アレホ・カルペンティエール財団住所：Empedrado No. 215, e/ Cuba y San Ignacio, La Habana Vieja.

カルペンティエール旧宅住所：Calle E No. 254 e/ 11 y 13, Vedado, La Habana.

代表的著書

日本語訳

『失われた足跡』（牛島信明訳、集英社、1978年）。集英社文庫、1994年 岩波文庫、2014年

『バロック協奏曲』（鼓直訳、サンリオ、1979年）。水声社、2017年

『ハーブと影』（牛島信明訳、新潮社、1984年）

『この世の王国』（木村栄一・平田渡訳、サンリオ、1985年）。水声社、1992年

『光の世紀』（杉浦勉訳、水声社、1990年）

『追跡』（杉浦勉訳、水声社、1993年）

『春の祭典』（柳原孝敦訳、国書刊行会、2001年）